間貫一宅（早春）

質素なる一間、正面襖、上手障子、障子の外に小庭あり。小形の金庫、用箪笥、帳簿、机の前に貫一、今迄計算し居りたる算盤を搦き、傭婆お豐と語る。

豐　ねえ貴方、恁うやつて、先の鰐淵さんの旦那様から引續きお世話になつて居ります丈、あの火事の晩の事を始終憶出しまして。御災難とは謂ひながら、お兩箇がお兩箇、お亡り遊ばすなんて本當に夢のやうで御座いますね。

貫　（頷きて）私などは、態々旦那が見舞に來て下さつた其晩、那云ふ事があつたのだから、那が暇乞だつたかと思ふと情無い。私でも蹤つて居たら、豈夫御夫婦二人とも燒殺すやうな事もなかつたらう、と思ふ程殘念でならんよ。然しお前丈でも逃げられたのがまあ仕合だ。

豐　能くまあ私のやうな年寄が逃げられたと思ひます位で、火事だ、と氣の付きました頃は、もう奥が一面の火で、私は夢中で飛出したのでございます。

貫　年寄のお前が然して逃げ完せた所を見ると、旦那やお上さんも、那の晩酒さへ呑んで居なさらなけりや、那麽災難も無かつたらに。お兩箇がお兩箇、死骸を並べて非業な御最期、然ぞ御無念だつたらうが、何しろ放火をした奴が狂人であつて見れば、どうもこれ喧嘩にもならないので。

豐　（思出して）然う〳〵、申上げるのを忘れて居りましたが、今朝

程お出懸け後へ、お客樣が見えまして、後刻又來るから、是非内に居てくれるやうにと有仰つて、お名前を伺つても、學校の友達だと言へば可い、と然う有仰つてお歸りになりました。

貫　學校の友達？（不審さうに）甚麽風の人かね。

豐　然やうでございますよ、年紀四十約の、蒙茸髭髯の生へた、剛い顏の、全で壯士見たやうな風躰をしてお在てした。

貫　（逾よ不審の面色）後に又來ると？

豐　然やうでございますよ。

貫　誰か知らん？用向は言つては行かんのだね（又考へて）左に右會つて見やう。

豐　然やうでございますか、それから毎もの赤樫樣が見えまして、後程又被入るやうにお言置きでございました。あゝ、それにお手紙が參つて居ります、お簞笥の上へ。

貫　（自ら封書を取り、上書を讀んで）宮、鳴澤……え、又寄來した！（と投出すやうに言ひつゝも、其儘見入る）

豐　襖を開けて立去りし婆、直ぐ又現る。旦那樣、今申上げた方が見えまして御座います。

貫　學校の友達と云ふのか。（と手にせし封書を急ぎ懷に入れて）此方へ通してくれ。

豐　婆去ると間も無く、荒尾讓介、上野山内に於けると同じ貧しげなる姿、ジオンソン形の古帽を片手に入り來る。

貫　おゝ、荒尾君！（と駭き惑ふ）

荒　間！（とばかり有間辭も無かりしが）久振じやな。

貫　まあま、此方へ入つてくれ給へ。

荒　（闖際に突立ちたるまゝ）いや、入るも可いが、間、何より先に聞きたいのは、君は今日でも僕を、此の荒尾を親友と思うて居るか、奈何か。（貫一の熟と考込むのを見て）考へる迄はなからう。親友と思うて居るなら、居る、然うなけりや、ないと言ふ迄で、是か否の一つじや。

貫　そりや昔は親友であつた。

荒　然う。

貫　今は然うぢやあるまい。

荒　何爲にな。

貫　其後何年も逢はずに居つたのだから、今では親友と謂ふことは出來まい。

荒　何有、前にも一向親友ではありやせんぢやないか、學士になるか、高利貸になるかと云ふ一身の浮沈の場合に、何等の相談もせんのみか、それなり失踪して了うたのは、何處が親友なのか。（と坐り）君の戀人は君に負いたぢやらうが、君の友人は決して君に負かん筈じや。其の友を何爲に君は棄てたのか。其通り棄てられた僕ぢやけれど、恁して又訪ねて來たのは、未だ君を實は棄てんのじやと思ひ給へ。然し、僕が棄てゝも棄てんでも、那樣事に君は痛痒を感ずるぢやなからうけれど、僕は僕で、友人の德義として、今日迄親友と思うて居つた君を棄つるには、是が一生の別に

なるのぢやから、其の餞別として一言云はんけりやならん。間、君は何の爲に金を殖ゆるのじや。大いなる樂として居つた彼の戀人を奪はれた爲に、其に易へる者として金といふ考を起したの乎。其も可からう、可いとして措く。けれどもぢや、其を獲る爲に强奪同樣な不義不正の事を働く必要が有る乎。如何に金が總ての力であるか知らんけれど、人たる者は惡事を行つて居つて、一刻でも安樂に居らるゝものではないのぢや。それとも、君は怡然として樂んで居る乎。長閑な日に花の盛を眺むるやうな氣持で催促に行つたり、差押を爲たりして居る乎。奈何かい、間。恐くぢや、然云ふ氣持の事は、此の幾年間に一日でも有りはせんのぢやらう。君の顏色を見い！全で罪人ぢやぞ。獄中に居る者の面ぢや。（と目を連瞻き）間、何で僕が泣くか、君は知つて居るか。今の間ぢや解らんぢやらう。幾ら金を殖えた所で、君は其分では到底慰めらるゝ事はありはせん。病が有るからと謂うて毒を飲んで、其病が癒るぢやらうか。君は恰も藥を飲む事を知らんやうなものぢやぞ。僕の友人であつた間は那樣痴漢ぢやなかつた、して見りや發狂したのぢや。一婦人の爲に發狂した其の根性を、彼の友人として僕が慙ぢざるを得んのぢや。間、君は盜人と言はれたぞ、罪人と言はれたぞ。狂人と言はれたぞ、少しは腹を立てい！腹を立てゝ僕を打つとも蹴るともして見い

貫　腹は立たん！

荒　腹は立たん？それぢや君は自身に盜人とも、罪人とも……。

貫　狂人とも思つて居る。一婦人の爲に發狂したのは、君に對して實に面目無いけれど、既に發狂して了つたのだから、どうも今更爲やうが無い。折角ぢやあるけれど、此儘棄置いてくれ給へ。

荒　然うか。それぢや君は不正な金で慰められて居るのか。

貫　未だ慰められては居らん。

荒　何日慰めらるゝのか。

貫　解らん

荒　而して君は妻君を娶うたか。

貫　娶はん。

荒　何爲娶はんの乎、恁して家を構へて居るのに獨身ぢや不都合ぢやらうに。

貫　然うでもないさ。

荒　君は今では彼の事を奈何思うて居るな。

貫　彼とは宮の事かね。那は畜生さ。

荒　然し、君も今日では畜生ぢやが、高利貸などは人の心を有つちや居らん、人の心が無けりや畜生じや。

貫　然云ふけれど、世間は大方畜生ぢやないか。

荒　僕も畜生かな。

貫　……。

荒　間、君は那の女が畜生であるのに激して猶且畜生になつたのぢやな。若し彼が畜生であつたのを改心して、人間に成つたとしたら、同時に君も畜生を罷めにやならんぢやな。

貫　那が人間に成る？能はざる事だ！詐つて人の誠を受けて、而して其を賣るやうな殘忍な奴が、何で再び人間に成り得るものか。

荒　何爲成り得んのか、彼は今では大いに悔悟して居るぞ、君に對して罪を悔いて居るぞ。

貫一は嗤笑ふ。

荒　彼も然して悔悟して居るのぢやから、君も悔悟するが可からう

貫　那は那で勝手に悔悟するのだらう、僕の知つた事では無い。奇生も少しは思知つたと見える、其も可からう。

荒　僕は先頃計らず彼に逢うたのぢや。彼は眞實悔悟して獨り苦んで居る、則ち彼は自ら罰せられて居るのぢやから、彼が悔悟してからに其樣に思うて居ると聞いたら、君は其を以て大いに慰められは爲んかな。君が此の幾年間に得た金、其は幾らか知らんけれど、其の寡からん金よりは、彼が終に悔悟したと聞いた一言の方が、遙に大いなる力を以つて君の心を慰むるであらうと思ふのぢやが、奈何か。

貫　それは僕が慰められるよりは、宮が苦まなければならん爲の悔悟だらう。宮が前非を悟つた爲に、僕が失つた者を再び得られる譯ぢやない、今日になつて彼が悔悟した、それでも好く悔悟したと謂ひたいけれど、是は固より然う有るべき事なのだ。始に那麼不心得を爲なかつたら、悔悟する事は無かつたらうに——不心得であつた、非常な不心得であつた！

荒　僕は彼の事は言はんのぢや。又彼が悔悟した爲に君の失うた者が再び得らるゝ譯でないから、それぢや慰められんと謂ふのなら、それで可いのじや。要するに、君は其の失うた者が取返されたら可いのぢやらう、而して其の目的を以つて君は貨を殖えて居るのぢやらう、なあ、然すりや、其の金さへ得られたら、好んで不正な營業を爲る必要は有るまいが。不正な手段を用んでも、富む道は幾らも有るぢやらう。君に言ふのも、な、其の目的を變へんよではない、只だ手段を改めよじや。路は違へても同じ高嶺の月を見るのぢやが。

貫　辱ないけれど、僕の迷は未だ覺めんのだから、間は發狂して居る者と想つて、一切管ひ付けずに措いてくれ給へ。

荒　然うか。奈何あつても僕の言は用られんのぢやな。

貫　容してくれ給へ。

荒　何を容すのぢや！貴樣は俺を棄てたのではないか、俺も貴樣を棄てたのぢや、容すも容さんも有るものか。

貫　今日限互に棄てゝ別れるに就いては、僕も一つ聞きたい事が有る。それは君の今の身の上だが。奈何したのかね。

荒　見たら解るだらう。

貫　見たばかりで解るものか。

荒　貧乏して居るのよ。

貫　それは解つて居るぢやないか。

荒　それ丈じや。

貫　それ丈の事が有るものか。何で官途を罷めて、而して那樣に貧乏して居るのか、樣子が有りさうぢやないか。

荒　話した所で狂人には解らんのよ。

貫　解つても解らんでも可いから、まあ話す丈は話してくれ給へ。

荒　其を聞いて何爲る。あゝ貫樣は何か、金でも貸さうと云ふのか。No. thank じや、赤貧洗ふが如く窮して居つても、心は怡然として樂んで居るのぢや。

貫　それだから猶、何爲て然う窮して、其を又樂んで居るのか、其には何か事情が有るのだらうから、其を聞せてくれ給へと言ふのだ。

荒　（哈々と笑つて）貴樣如き無血虫が那樣事を聞いたとて何が解るものて、人間らしい事を言ふな！

貫　然うまて辱められても辭を返すことの出來ん程、僕の軀は腐れて了つたのだ……

荒　固よりじや。

貫　恁う腐つて了つた僕の軀は今更爲方が無い、けれども、君は立派に學位も取つて參事官の椅子にも居た人、國家の爲に有用の器である事は、決して僕の疑はん所だ。で、僕は常に君の出世を豫想し、君を懷ふ念の胸中を去つた事はありはせんよ。今日迄君の外には一人の友も無いのだ。いつぞや君が愛知へ赴任すると聞いた時は、嬉しくもあり。可懷くもあり、久し振で君に逢つて慶賀も云ひたいと思つたけれど、奈何も逢れん僕の軀だから、切て陰

ながらでも君の出世の姿が見たいと、新橋の停車場へ行つて、君の立派に成つたのを見た時は、何も彼も忘れて僕は唯嬉しく涙が出た。君の出世を見て、それ程嬉しかつた僕が、今日君の那樣に零落して居るのを見る心持は甚麽であるか。察し給へ。自分の身を顧ずに恁云ふ事を君に向つて言ふべきではない、であるから、是は間が言ふのではない、君の親友の或者が君の身を愛んで忠告するのだとして聽いてくれ給へ。何云ふ事情か、君が話してくれんから知れんけれど、君の躰は十分自重して、社會に立つて壯なる働を作して欲しいのだ。君は然して窮迫して居るやうだけれど、決して世間から棄てられるやうな君でない事を僕は信ずるのだから、一箇人として身を愛み給へと謂ふのではなく、國家の爲に自重し給へと願ふのだ、君の親友の或者は君が其才を用る爲に社會に出やうと爲るならば、及ぶ限の助力を爲る精神であるのだ。

荒　うゝ、それぢや君は何か、僕の恁じて落魄して居るのを見て氣の毒と思ふのか。

貫　君が謂ふほどの畜生でもない！

荒　其處じや、間。世間に貴樣のやうな高利貸が在る爲に、適れ用らるべき人才の多くがじや、名を傷け、身を誤られて、社會の外に放逐されて空しく朽つるのぢやぞ。今日の人才を滅す者は、曰く色、曰く高利貸ぢやらう。此通り零落れて居る僕が氣の毒と思ふなら、君の爲に艱されて居る人才の多くを一層不敏と思うて遣れ。僕も恁して窮迫して居る際ぢやから、憂を分つ親友の一人は

誠欲しいのぢや。昔の間貫一のやうな友が有つたらばと思はん事は無い。其の友が僕の身を念うてくれて、社會へ打つて出て壯に働け、一臂の力を假さうと云ふのであつたら、僕は如何に嬉しからう！世間に最も喜ぶべき者は友、最も惡むべき者は高利貸じや。如何に高利貸の惡むべきかを知つて居る丈、僕は益す友を懷ふのじや。其の昔の友が今日の高利貸——其の惡むべき高利貸！

貫　吾又何をか言はんじや。

荒　段々の君の忠告、僕は難有い。猶自分にも篤と考へて、此の腐れた軀が元の通潔白な者に成り得られるなら、其に越した幸は無いのだ。君も亦自愛してくれ給へ。僕は君には棄てられても、君の大いに用られるのを見たいのだ。又必ず大いに用られなければならん其人が、然して不遇で居るのは、殘念であるよりは僕は悲しい。那樣に念つても居るのだらう、一遍君の處も訪ねさしてくれ給へ。何處に今居るのかね。

荒　まあ高利貸などは來て貰はん方が可い。

貫　其日は友人として訪ねるのだ。

荒　高利貸に友人は持たんものな。

折から雍かに紙門を啓きて出て來る滿枝。其不躾に呆れし貫一よりも、荒尾の驚きは一方ならで、努めて狼狽へたる樣を見せじと爲る。

滿枝は先づ貫一に挨拶して、さて荒尾に向ひて一際禮を篤く爲る。

荒　是は不思議な所で！成程間とは御懇意かな。

貫　君は奈何して此方を識つて居るのだ。

荒　そりや少し識つて居る。然し、長居はお邪魔ぢやらう、大きに失敬した。

満　荒尾さん、恁云ふ處で申上げますのも如何で御座いますけれど。

荒　あゝ、そりや此で閉くべき事ぢやない。

満　けれど毎も御不在ばかりて、お話が付きかねると申して弱り切つて居りますので御座いますから。それに、此の前で御座いましたが、那の者が伺ひました節、何か御無禮な事を申上げましたとかて、大相な御立腹て、お刀をお拔き遊ばして、斬つて了ふとか云ふ事か御座いましたさうて。

荒　有つた、實際那奴斬却つて了はうと思うたが、那でも犬猫ぢやなし、斬捨にもなるまい。

満　まあ、怖い事ぢや御座いませんか。私なぞは滅多に伺ふ譯には參りませんて御座いますね。

荒　僕が美人を斬るか、其目て僕が殺さるゝか。どう歸つて、刀でも拭いて置かう。

貫　荒尾君、切めてどうか飯でも食べて行つてくれ給へ、丁度最う時刻だから。

荒　折角ぢやが、盜泉の水は飲まんて。

満　まあ貴方、私お給仕を勤めます。さあお下に被居つて。

荒　全で御夫婦のやうじやね。是は好一對ぢや。

滿　其のお意で、奈何ぞお席に被居つて。

荒　（立上つて、貫一を熟と睨み）間、貴樣は……（其聲に振仰ぐ兩人）はッ、はッ、物言へば唇寒しぢや。（と出て行く）

貫一は思案に沈めつゝ送りに立つ。座に歸りて猶沈める樣。

滿　（擦寄り）問さん、貴方奈何あそばして。非常にお樂ぎ遊ばして被居るぢや御座いませんか。

貫　一躰貴方は奈何して荒尾を御存じなのですか。

滿　私よりは、貴方が那方の御朋友で被居るとは、實に私意外で御座いますわ。

貫　貴何は奈何して御存じなのです。

滿　まあ債務者のやうな者なので御座います。

貫　債務者！荒尾が？貴方の？

滿　私が直接に關係した譯ぢや御座いませんのですけれど。

貫　はあ、而して額は若干なのですか。

滿　三千圓約で御座います。

貫　三千圓？どうも事實として信ずる事は出來んくらゐだ、他が何で三千圓と云ふ金を借りたか知らん。

滿　それは那方は連帶者なので御座います。

貫　はあ！然して借主は何者ですか。

滿　大館朔郎とか云ふ岐阜の民主黨員で、選擧に失敗したものですから、其の運動費の後肚だとか云ふ話でございました。

貫　うむ、如何にも！大舘朔郎……それぢや事實でせう。

滿　御承知で被居いますか。

貫　其は荒尾に學資を給した人で、他が終始恩人と言つて居つた其人だ。（と黯然）

豐　婆、襖を啓けて姿を現す。

　赤樫樣、只今櫻家とかゝらお使が參りました。

滿　あゝ、然うですか。（と立つて行く）

　直ぐ又引返し來る。

滿　間さん、私今日取引の事で、此先の櫻家まで參つたので御座いますが、丁度先方も參つたさうで、只今使を寄來しましたから……尤も三四十分位で濟む意で。歸りに又お邪魔致しますよ、未だお話致したい事もございますから。

貫　はあ。（と冷に答ふ）

　滿枝出で去る。後には貫一唯一人物思ふ。

　はら〳〵と降り出す雨の音。

貫　あゝ雨のやうだ、途中で荒尾は降られたらう。（と面を擧げ）惜しいものだ、どうか荒尾を救つて遣る道は無いものかなあ。（と考込む。有間してから懷より先の封書を取出し）然う〳〵、荒尾の話にも宮が悔悟して苦んで居ると言つたが、ぢや此の手紙も、究竟罪を赦してくれと謂ふのだらう。其外には、見なければならん用事の有る譯は無い。悔悟したから赦したからと云つて、其が奈何なるのだ。悔悟したから他の操の疵が癒えて、又赦したから、

宮山の事が無い昔に成るのか。宮！貴様は一生汚れた宮ではないか。事の破れて了つた今日になつて、悔悟も赦してくれも要つたものか、無益な事だ！熱海で別れる時も、俺の此の胸の中を可憐と思つて考直してくれ、と實に男を捨てゝ頼んだではないか。其の貫一に負いて……何の面目有つて今更悔悟……晩い

（手にせる文を疊に鞭ち、終に細の如く引振つて火鉢に燒く）

婆現る。

豐　お客様で御座います。

貫　お客？誰だ。

豐　荒尾さんと有仰いました。

貫　何、荒尾？今歸つたばかりぢやないか。

豐　お通し申しますて御座いますか。

貫　おゝ、早くお通し申しな。

入り來れるは荒尾にあらで、美しく裝へる一婦人、實は宮。

貫　（訝かしの眼を瞪りて）荒尾さんと有仰るのは貴方で。

宮　……。

貫　何ぞ御用でございますか……何云ふ御用向ですか、伺ひませう（右眼左瞻て）宮!?（と貫一の聲は筒拔けて走る）何用有つて來た！

宮　貫一さん！どうぞ堪忍して下さいまし。

貫　早く歸れ！宮、今更お互に逢ふ必要は無い。又お前も何の顏で逢ふ意か、先達而から頻に手紙を寄來すが、那は一通でも開封し

たのは無い、來れば直に燒棄てゝ了ふのだから、以來は斷じて寄來さんやうに。さあ、早く歸つて貰ひたい（と襖の那方に向ひ、聲高に）婆や、お客樣のお立だ、お供に然う申して。

宮　貫一さん、私は今日は死んでも可い意でお目に掛りに來たのですから、貴方の存分に甚麼目にでも遭せて、然して左も右も今日は勘辨して、お願ですから私の話を聞いて下さいまし。

貫　何の爲に！

宮　私は全く後悔しました！貫一さん、私は今になつて後悔しました!!悉い事は此間からの手紙に段々書いて上げたのですけれど、全で見ては下さらないのでは、後悔して居る私の甚麼切ない思をして居るか、お解りにはならないでせうが、お目に掛つて口では言ふに言はれない事ばかりですけれど、貫一さん、迚も私は來られる筈でない處へ恁して來るのには、死ぬほどの覺悟をしたのと思つて下さいまし。

貫　其が何爲たのだ。

宮　然まで覺悟をして、是非お話を爲たい事が有るのですから、御迷惑でもどうぞ、どうぞ貫一さん、左も右も聞いて下さいまし。

貫　一月の十七日、那時の事を覺えて居るか……さあ、奈何か。

宮　私は忘れは爲ません。

貫　うむ。那時の貫一の心持を今日お前が思知るのだ。

宮　堪忍して下さい。

襖の外から婆の聲。

豊　旦那様、赤樫さんがお歸りで御座います。

貫　赤樫？那方へ待して置け（宮に向ひ）歸れ！

其儘出行かんとける貫一の袂に犇と縋り付きて、宮は泣伏す。

貫　えゝ、何の眞似だ！

宮　貫一さん！

貫　何を爲る、此の恥不知！

宮　私が悪かつたのですから、堪忍して下さいまし。

貫　えゝ、聒しい！此を放さんか。放さんかと言ふに、えゝ、もう！さあ、早く歸れ。

宮　もう二度と私はお目には掛りませんから、今日の所は奈何とも堪忍して、然して小少でも機嫌を直して、私のお詫に來た譯を聞いて下さい。

貫　えゝ、煩い

宮　それぢや打つとも毆くともして……。

貫　那樣事で俺の胸が霽れると想つて居るか、殺しても慊らんのだ。

宮　えゝ、殺れても可い！殺して下さい。私は。貫一さん、殺して貰ひたい、さあ、殺して下さい、死んで了つた方が可いのですから。

貫　自分で死ね！死ね、死ね。お前も一旦棄てた男なら、今更見とも無い態を爲ずに、何爲死ぬ迄立派に棄て通さんのだ。さあ、もう歸れと言つたら歸らんか？

宮　歸りません！私は甚麽事しても此儘ぢや……歸れません。

貫　さあ、客が有るのだ、好加減に歸らんか。えゝ、放せ。客が有ると云ふのに奈何するのか。

宮　ぢや私は此に待つて居ますから。

貫　知らん！もう放せと言つたら。

所へ襖を開けて、つか〳〵と入り來る滿枝、貫一上手の障子を啓けて。衝と庭へ出て去る。

滿　（嫉妬の目を睜りて）始めましてお目に掛りますが、貴方は誰方樣で？（坐る）

宮　（居住を直して）はい、此方の親類筋の者で御座いまして。

滿　おや、然やうで被在いますか。手前は赤樫滿枝と申しまして、間樣とは年來の御懇意で、もう御親戚同樣に御交際を致して、毎々

お世話になつたり、又及ばずながらお世話も致したり、始終お心易く致して居りますので御座いますが、ついぞ、まあ從來お見上げ申しませんで御座いました。

宮　はい、つい先日まで永らく遠方へ參つて居りましたもので御座いますから。

滿　まあ、然やうで。唯今に何方に。

宮　あの……池之端に居ります。

滿　へえ、池之端、お宜しい處で御座いますね。然し、夙て間樣のお話では、御自分は身寄も何も無いから、どうぞ親戚同樣に末の末まで交際したいと有仰るもので御座いますから、全く然うとばかり私信じて居りましたので御座いますよ。それに唯今恁して伺

ひますれば、御立派な御親戚がお有り遊ばすのに、何云ふお意で那麽事を有仰るので御座いませう。何も親戚のお有りあそばす事をお隠しになるには當らんぢや御座いませんか。那の方は時々然云ふ水臭い事を一體作さるので御座いますよ。

宮　（急に歸支度をして）大相長座を致しまして、貴方も御用のお有り遊ばした所を、心無いお邪魔を致しまして、相濟みませんで御座いました。

滿　いゝえ、もう、私共は始終上つて居るので御座いますから、些とも御遠慮には及びませんで御座います。

宮　然やうなら私はお暇を致しませう。

滿　お歸去で御座いますか。丁度唯今小降で御座いますね。

宮　いゝえ、幾ら降りました所が俥で御座いますから。

宮は歸り行く。後に滿枝は妬ましさの堪へがたき樣にて、宮が忘れし絹ハンカチーフを見るや、幾度か疊に打付けて、果は寸々に引裂く。

（幕）

第六幕

鹽原溫泉宿
靖國神社裏

登場人物

高利貸　間貫一
會社員　遊佐良橘
遊佐弟　狹山元輔
法學士　荒尾讓介
藝妓愛子　實名靜
女高利貸　赤樫滿枝
唯繼夫人　富山宮
宮の母　鳴澤隆
鹽原村役場助役
溫泉宿女中

鹽原溫泉宿（春）

壁を仕切に客間二つ、奥より縁側折廻して、庭、下手に木戸、庭越に鹽原の山景、夜更けて八日ばかりの弦月落懸る。

谷川の音、梟の聲。

貫一、鹽原村役場の助役を送出し、木戸に立懸り居る。

助（空を見て）いや、月が最う入り懸りやしたのを見やすと、大分遲いでやすな。

貫　それではお話の田地の方はそれで可いとして、山林の方を一つお調べ下さい。貴方の前で然う言ふのも何だが、此節の田舍大盡はなか〳〵油斷がなりません。浮り言ふなりに貸出さうものなら、

取んでもない煮湯を呑される事が有りますから、能く調べて懸らんと險難で。

助　然やうでやすども、是が百や二百の貸借とは違うでやすからな。何有、鹽原村の事なら、手前もう十年から助役をして居りやすで、生きた臺帳も同樣、決してお間違はさせませんで御座りやすよ。ぢや、明日にも早速山林の方を取調べて……。

貫　何分宜しく、お骨折の所は十分お埋合せします。

助　それ〳〵、其をどうかお忘れなく、はゝはゝ、いや遲くまでお邪魔でやした。お寐みなされやし。（と木戸を出て下手へ入る）

女　お客樣はお歸りてやすか。

貫　あゝ、大變遲くなつて氣の毒だつたね、もう何時か知らん。

女　十二時廻つたで御座りやすよ。

貫　十二時を？

女　（手紙を出して）此の手紙宵に來やしたさうで御座りやすが、つい忘れて居りやして。

貫　（受取りて）東京から附箋して寄來したのだな。（裏返して）むゝ、又宮めが寄來したのだ。（と獨言ちつゝ見入る）

女中、木戸の緊をする。貫一上手の己が座敷に歸らんとして、些と手前の座敷を覗く。

貫　（目もて其と女中に）居ないやうだね。

女　お二人とも今お風呂でやすよ。お床を取りやすか。

うむ、取つて置いて貰はう。（と座敷に入る）

女中は床を展べ、挨拶して去る。後に貫一、例の手紙を火鉢に焼かんとして遲ひ、暫く心惑ひし後、終に思切りて始めて開封して讀む。

梟頻に鳴く。

……私事耻とも思はぬ者との御さげすみも顧ず、先頃推して御許まで參じ候胸の内は、なか〳〵御目もじの上の辭にも盡し難く……明る日より蓐に就き候まゝ、唯こ懷しき御方の事のみ思續け候ては、みづからの儚さ〳〵身の上を慨き、今日は昨日より痩衰へ申候……

……此の蓐に就き候が元にて、はや永からぬ吾身とも存候まゝ、何卒これまでの思出には、たとひ命ある内こそ如何やうの御恨は受け候とも、今はの際には御前樣の御膝の上にて心易く息引取り度と存候へども、それも愿はぬ罪深き身に候上は、もはや再び懷しき〳〵御顏も拜し難く、猶又前非の御ゆるしも無くて、此儘相果て候事かと……さ候へば私事如何に自ら作りし罪の報とは申ながら、かくまで散々の責苦を受け、かくまで十分に懺悔致し、此の上は唯死ぬばかりの身の可哀を、つゆほども御前樣には通じ候はで、これぎり空く相成候が、餘に口惜く存候故、一生に一度の神佛にも絶り候て、此文には私一念を卷込め、御許に差出しまゐらせ候。……

……唯今の此の氣分苦しく、何とも堪難き樣子にては、明日は今日よりも病重き事と存候……私事空しく相成候とも、決して餘の病には無之、御前樣御事を思死に死候ものと、何卒々々御惡み被下、其段はゆめ〳〵詐にては無御座、みづから堅く信じ居候事に御座候……

……明日は御前樣御誕生日に當り申候へば、わざと陰膳を供へ候て、私事も共に御祝ひ可申上……

……

（貫一有繫に目を繁瞎さて、黯然）

廊下傳ひに奥の方より、狹山元輔、藝者愛子本名お靜、湯上り姿にて己が座敷に歸る。

火鉢を中に對座して、兩人辭も無く思に沈む。

靜　（やう〳〵面を擧げ）狹山さん、些と、狹山さんてば、貴方何を考へて居るのね。今更何も考へる事は有りはしないわ。もう那樣溜息なんぞを吻くのはお舍しなさいよ。

狹　お前二十……二だつたね。

靜　それが奈何したの。貴方が二十八さ。

狹　あの時はお前が十九の夏だつけかな。

靜　あゝ、然う、何でも袷を着て居たから、丁度今時分でした。湖月さんの那の池に好いお月が映して居て、暖い晩で、貴方と一處に涼みに出たんですよ、善く覺えて居るわ、那が十九、二十、二

十一、二十二と全三年に成るのね。

狹　然う〳〵昨日のやうに思つて居たが、もう三年に成るなあ。

靜　何だか、恁う全て夢のやうね。

狹　夢だなあ！

靜　夢だわねえ！恁う成るのも皆約束事ぢやあらうけれど、私は、狹山さん貴方に申譯が無い！堪忍して下さいまし。

狹　そりや何有、お互の事だ。一人の兄貴にまで高利の金を背負せて、苦めて居るやうな弟だから他の信用は無くするし、俺が意氣地の無いばかりに、お前も這麽破滅にして了うし、實際濟まない。然しお前が心を變へずに居てくれたのが俺は嬉しい、難有いと思ふよ。

靜　那樣狹山さん、私の方こそ貴方を這麽破滅にして、濟まないわ。貴方のお兄さんに迄御迷惑を懸けたと云ふのも、究竟私故なんですから、貴方が惡いのぢやなくつて、皆私が惡いのよ。私一度貴方のお兄さんにも染々會つてお詫がしたいんですけれど。

狹　もう兄貴の事を言ふのは舍さう、つい言はれると、此の意氣地の無い無能な弟故に、那の物堅い兄貴や義姉さんが甚麽に苦んで居なさるか、と其が目に浮んで、却て覺悟の障になる！

靜　其も是も悉皆那奴の爲だわ。えゝ、悔しい！私は屹度執着いて、此怨は返して遣るから。

上の間の貫一は、夜更けて語る二人の聲音のつい耳に付きて、我にも無く聞耳立てる。

狹　那奴も好加減な馬鹿ぢやないか。

靜　馬鹿も大馬鹿よ！方圖の知れない馬鹿だわ。畜生！情人のある女が金で靡くか、靡かないか、些は考へながら遊ぶが可い。私は死んでも那奴の怨は忘れはしない！だが、私が居なくなつて、那奴は鼻を明くし、内ぢや然ぞ騷いで居るでせう。

狹　だから、どう手を廻して捜さないとも限らないから、餘り遲々しちや居られないのだ、俺も兄貴の所へそれとなく暇乞の手紙を出して置いたから、那の屆かない内に……。

靜　どうで、狹山さん先はもう知れて……。

狹　然うだ。

靜　だからねえ、もう早い方が可ござんすよ。

二人とも今更に不覺の涙に沈む。

梟の聲、谷川の音。

狹　（稍有りて後、半ば涙の中より）お靜、膳を持つて來ないか。

靜　えゝ（と微に答へて、宵の内に取寄せ置きたる膳を片隅より運ぶ）狹山さん、私は何だか貴方に言殘した事が未だ有るやうな心持がして……。

狹　吁、もう恁う成つちやお互に何も言はないが可い。言へば猶且未練が出る（熟と俯向いて目を閉づ）

靜　貴方、その指環を私のと取替事して下さいね。

兩人指環を取替へる。

狹　お靜、那樣事は無いとは念ふけれど、運惡く遲れたら、俺は屹

度後から往くから――甚麼にしても往くから、恨まずに待つて居てくれ、よ、可――可いか。其代り、偶としてお前が後になるやうだつたら、俺は死んでも……魂は……おまへの陰身を離れないから、必ず心變を……す、するなよ、お靜。

靜　那樣事を言はないで、一處に……連れて……往つて……下さいよ。

狹　一處に往くとも。

靜　一處に！一處に往きますよ。

狹　さあ、それぢや、此、此の世の……別に一盃飲むのだ。もう泣くな、お靜。

靜　泣、泣かない。

兩人泣く。

狹　猪口てなしに、その湯呑に爲やう。

靜　さう、ぢや半分づゝ。

狹　おまへの酌で飲むのも……今夜限だ。

靜　狹山さん、私は這麼に苦勞をして置きながら、到頭一日でも……貴方と一處に成れずに、藝者風情で死んで了ふのが……悔しい、私は！

狹　（一息に湯呑の半を呷りて）さあ、お靜。

靜　（受けながら）狹山さん、私は今更お禮を言ふと云ふのも異な者だけれど、貴方は長い月日の間、私のやうな這麼不束の我儘者を、能くも愛相を盡さずに、深切に、世話をして下すつた。一日も早

く所帶でも持つやうに成つたら、一度に此の恩返しを爲ませう、
と私は其ばかりを樂に、出來ない辛抱もして居たんだけれど、
もう、今と成つちや、何も彼も水……水……水の……泡。
つい心易立から、浸々お禮も言はずに居たけれど、狹山さん、も
し是限で、貴方も……私も……土に成つて了へば、又とお目
には掛れないんだから、せめては、今改めて、私はお禮を申しま
す。

狹　もう、そ、そ、那樣事……言つて……くれるな！冥路の障
だ。兩人が一處に死なれりや、それで不足は無いとして、外の事
なんぞは念はずに、お靜、お互に喜んで死なうよ。

靜　私は喜んで居ますとも。嬉しいんですとも。嬉しくなくて奈何
しませう。此のお酒も、祝つて私は飲みます。貴方一つお酌して
下さいな。

狹　（名殘盡せぬ躰にて）お靜、覺悟は可いか。

靜　可いわ、狹山さん。

狹　可けりや。

靜　いつそ最う早く……。
　月落つ。

狹　（袱紗包の紙入を取上げて、一包の粉劑を出す）さあ、其酒を取
つてくれ。お前のには俺が酌をするから、俺のにはお前が。
　二つの茶碗を置並べ、粉劑を其内に頒つ。

靜　（忍音に）南無阿彌陀佛々々々々々々々々

兩箇は心も消入らんとする時、ばた〳〵と廊下傳ひに躍入りたる貫一。

貫　貴下方は、怪しからん事を！實に取んでもない、何を被成るので。無斷に御座敷へ入つて、甚だ失禮ぢや御座いますけれど、實に危い所！貴下方は奈何なすつたのですか。（と二人の間に坐り、手早く湯呑を遠退く）

愕然とせしも、直ちに又悄然として面を擧げざる狹山、其陰に女は半ば身を潜め居る。

貫　勿論是には深い事情がお有んなさるでせう。ですから込入つたお話は承はらんでも宜い、但何故に貴下方は活きて居られんのですか。それだけお聞せ下さい……お二人が添うに添れんと云ふやうな事ですか。

狹山は微に頷く。

貫　然やうですか。而して其の添れんと云ふのは、何故に添れんのです。其の次第を伺つて、私の力で及ぶ事でありましたら、隨分御相談合手にも成らうかと、實は考へるので。私は何も洒落に貴下方の秘密を聽かうと云ふのぢやありません、可うございますか、顯然と聽くだけの覺悟を持つて聽くのですから、さあ、事情をお話し下さい！

狹　はい御深切に……難有う存じます……。

貫　さあ、お話し下さい。

狹　はい。

貫　今更お裏みなさる必要は無からうと私は思ふ。いや、つい私は申上げんで居つたが、私は東京の麹町の者で、間と申して辯護士です。

狹　はい、段々御深切に、難有う存じます。

貫　それぢや、お話し下さるか。

狹　（漸う心を決して）はいお聞に入れますで御座います……何から申して宜しいやら……。

貫　いや、其の、何ですな、貴下方は添ふに添れんから死ぬと有仰る——何爲添れんのですか。

狹　はい、實は私は、恥を申しませんければ解りませんが、主人の金を大分遣ひ込みましたので御座います。

貫　はあ、御主人持ですか。

狹　然やうで御座います。私は東京のさる商會に勤めて居りまして、狹山元輔と申しまする。又是は新橋に勤を致して居ります者で、柏屋の愛子と申しまする。

名宣られし女は面伏に會釋する。

貫　はあ、成程。

狹　然る所、昨今是に身請の客が附きまして。

貫　あゝ、身請の？成程。

狹　否でも其方へ參らなければ成りませんやうな次第。又私は其の引負の爲に、主人から告訴致されまして、活さて居りますれば、其筋の手に掛りますので、如何にとも致方が御座いませんゆゑ、

無分別とは知りつゝも、つい突迫めまして、面目次第も御座いません。

俠　はゝあ。然うすると爰に金さへ有れば、奈何にか成るのでせう！貴方の費消だつて、其の金額を辨償して、宜しく御主人に詫びたら、無論内濟に成る事です。婦人の方は、先方で請出すと云ふのなら、此方で請出す迄の事。而して、貴方の引負は若干許の額に成つたのですか。

俠　はい二千圓ほど。

貫　二千圓。それから身請の金は？

俠　（女を顧みて二言三言小聲に語り）何や彼やで八百圓くらゐは要りますので。

貫　二千八百圓、それだけ有つたら、貴下方は死なずに濟むのですな。それぢや死ぬのは充らんですよ！二千や三千の金なら、隨分そこらに滾つて居やうと思ふ。就いては何とか心配して上げたいと考へるのですが、先づ左に右貴下方の身の上を畧とお話し下さらんか。

俠　はい、つい一面識も御座いません私共に、段々と御深切のお心遣。却つて恥入りまして、實に面目次第も御座いません。實は只今申上げました二千圓の費消と申しますのは、究竟遊蕩と遺繰の苦紛れ、相場に手を出しましたので、色々もう彌縫も爲盡した擧句なり、迚も辨償の見込の無い所から、商會では斷然告訴すると云ふ其最中へ、生憎又是の方の身請騒が起りましたので。

貫　成程。

俠　身請の對手と申すのは、丁度去年の正月頃から來出した客で、富山銀行といふのが御座います、那裏の取締役で。

貫　え!? な……な……何ですか?

俠　御承知で御座いますか、那の富山唯繼と云ふ。

貫　富山? 唯繼? 其の富山唯繼が身請の客ですか。

俠　はい、然やうで御座いますが、貴方は御存じで被在いますので。

貫　知つて居ます! 好く……知つて居ます! 那奴が身請の?

靜　はい、然やうなんで御座います。

貫　然すると、去年の始から貴方は他の世話に成つて居つたのですか。

靜　私は那麼人の世話なんぞに成りは致しません!

貫　はあ? 然ですか。世話に成つて居つたのぢやないのですか。成程な……解りました、好く解りました。それでは恁云ふのですな、貴方は勤をして居つても、外の客には出ずに、斯人一箇を守つて……然ですね。

靜　さやうです。

貫　而して、餘所の身請を辭つて——富山唯繼を振つたのだ! 然ですな。

靜　はい。

貫　嗚呼……感心しました! 實に立派な者です! 貴方は命を捨てゝも……此人と……添ひたいのですか! (漫に涙を浮べて)

勿論然う無けりや成らん事！然う有るべき事です。今日の此の輕薄極つた世の中に、其の天晴な心懸、私は實に嬉しい！（と目を拭つて）私は涙が出る程嬉しいのです。それで富山は奈何しました。

靜　來る度に何の彼のと申しますのを、躰能く辭るんで御座いますけれど、もう煩く來ちや、やれ末始終恁して遣つたら奈何だとか、今の妻君は、他は奈何だから、恁為るとか申しまして。

貫　妻君に就いて何云ふ話が有るのですか。

靜　何ですか知りませんが、那の人の言ふんでは、其の妻君は、始終寐て居るも同樣の病人で、有つても無いも同然だから、其内に隱居でもさせて、私を内へ入れて遣るから、とまあ然云つたやうな口氣なんで御座います。

貫　而して其は事實なのですか、妻君を隱居させるなどゝ云ふのは、はゝあ。折合が惡いですか……病身ですか……隱居をさせるのですか！……あゝ……然うですか！

靜　那樣捫擇最中に、狹山さんの方が騷擾に成りましたんで。

俠　私も金故命を棄てるのは誠に殘念では御座いますが、と申して外に工夫も無し、相談對手と云つては唯一人の兄……其兄にも依樣是の事で、前に最う三百圓の迷惑を懸けて居りますので、兄は其爲に高利貸に責められて、殆ど奈何する事も出來ない場合、迚も死ぬより外はない！私は死ぬと覺悟をしたが、お前の了簡は奈何か、と實は私が申しましたので。

貴　成程。そこで貴方が？

靜　私は何で一人殘つて居りませう、それぢや一處にと約束を致して、爰へ參つたんで御座います。

貴　いや、善く解りました。然う申しては失禮か知らんが、貴方の商賣柄で、一箇の男を守つて、而して其人の落目に成つたのも見棄てず、一方には、身請の客を振つてからに、後來花の咲かうといふ躰を、男の爲に少しも惜まずに死なうとは、實に天晴なもの！餘り見事な貴方の其の心掛に感じ入つて、私は……涙が出ました、是が若し、好いた、惚れたと云ふのは上邊ばかりで、其實は移氣な、水臭い者とも知らず、這箇は一心に成つて思窮めて居る者を、いつか寐返を打れて、突放されるやうな目に遭つたとしたら、其の棄てられた者の心の中は、甚麼だと思ひますか、然云ふのが有ります！私は世間には然云ふの丶方が多いと考へる。私は現に然云ふのを睹て居る！それに就けても、あゝ、どうか其の美しい心掛、毎も今夜のやうな其心を持つて、睦しく暮して下さい、私は其が見たいのです。今は死ぬ所ではない、死ぬには及びません、二千や三千の事なら、私が奈何でもして上げます。

狹山お靜の兩人、唯呆るゝばかりの喜悅の處へ、遊佐良橘、女中に導かれて、惶忽しく入來る。

女　お客樣で御座りやす。

遊　（兩人の顏を見て）おゝ、兩人とも……間に合つたか！（嬉しさに吻と安堵の息を嘘き）手紙を見た時には、もう迚も俺は駄目

と思つたけれど……未だ、未だ死なずに居てくれたか！（と崩れる如く、どッかと座る）

狹　兄さん面目次第も有りません！（貫一を指して）實は最う此世でお目には懸かれなかつたのですが、兄さん、兩箇は此の御方に助けて戴いたのです。

遊　何？　此の御方に……（と始めて貫一に心着き）や、君は鰐淵の？

貫　おゝ、貴方は遊佐さん！

（つなぎ）

靖國神社裏（初夏）

九段靖國神社の境内裏手、四阿屋、圓卓、共同椅子。梅櫻の若葉茂れる木立を隔てゝ、正面富士見町の通には、今日開業式の商會、赤球の提燈賑かに釣渡したるが葉隱れに見ゆ。

下手に靖國神社の玉垣。

玉垣の蔭より貫一、荒尾兩人、語りながら出て來る。

荒　君の悔悟を聞いて、僕も五六年以來覺えん愉快じゃ。て、今日は君も色々用事のある躰ぢやらうから、其内改めて寛り來る事に爲やう。

貫　僕は何有、些とも用事なぞ有りはせんのだから、まあ最う少し

談して居てくれ給へ。追付け夕飯の時刻でもあるし、それに今日は遊佐君も來る筈だから、君も迷惑で無ければ、一處に席へ直つてやつて貰ひたい。(と四阿屋の腰掛に腰を下して)家では那通り取込んで居て話も身にならなかつたが、爰なら靜かだから、向ふの支度が調ふまで寛り君の話を聞かうか。

荒

(も腰掛けて)話と云うた所で、君が悔悟すりや最う荒尾が言ふ事は無い。實はな、君が遊佐の弟の狹山とやら云ふ男を救うた話を、蒲田から聞いて、僕は全くぢやが、冷たい死骸に暖みを見付けたやうに喜んだのじや。血も涙も涸果てゝ了うたと見切つて居つた間にも、未だ惻隱の情を動かす丈の涙がある。然すりや、最う一遍忠告して見て、今度は何でも眞人間に立返らせて、と然う思うて今日は出掛けて來たのじや。君が悟悔したからには、僕も最う冗うは何にも言はん、唯願はくは、今後の方針を誤らんやうに其丈注意して置く。

貫

君の深切は實に忘れはせん！何時だつたか君が來てくれた那時にも、熟々友誼と云ふ事が今更のやうに身に泌みて感じたのだが、那から間も無く鹽原へ行つて、命を棄てゝもお互の愛情を變へまいと云ふ健氣な人達を眼前見て、あゝ世中には恁ういふ美しい誠もあるか、と思ふと、其時始めて僕は百萬金に易へ難い慰を得たやうな心持が爲たのだ。それから、那の二人を家へ引取つて、段段世話も爲、又世話にもなつて見ると、金で買へない人情の暖い所が沁々分つて、男の氣立と云ひ、女又、卑しい境界に居た

にも似合はぬ、命を捨てゝも實意をウ[illegible]とするほどの女は、何かに付けても優しい心意氣！成程！[illegible]、宮や赤樫のやうなばかりが女で無い、と始めて悟つたのじ[illegible]

荒　（微笑して）じやが、宮さんは最う君より先悟つて居る、君以上にも悔悟して居るぞ。どうじや間、此後彼が容してくれいと云うて來たら、君は奈何する意か。

貫　さあ、奈何したものか（と思案して）其時にならねば分らん。君は其後宮に逢んかね。

荒　其後掛違うて會はんが、いづれ罪に責められて泣いて居るじやらう、那も可哀さうじや。

兩人暫く辭途絶ゆ。

貫　（氣を變へて）それで、今君も今後の方針を誤らんやうにと注意を爲てくれたが、僕も實は其れを思つて居るので。天下に金ほど人を誤らすものは無い——宮が今日の不幸も僕が昨日の迷も皆其だが——君の所謂不義非道で集めた不淨な財である丈に、僕は一層其を善事に活用したいと思ふ。

荒　然うじや、誤つて散ずる時は、是ほど又世を賊し人を過るものは無い。今日開業する遊佐が弟の那の事業、（と木立の間より球燈の其方を見遣り）那なぞは同じ商賣と言うても、多少社會の公益たるべき性質を持つて居る。君が悔悟の一端としては、先づまあ其の所置を得たものじやらうと、僕は先刻から然う思うて居るのじや。

貫　那は那として。君もどうか然るべき虚考へてくれ給へ。

荒　宜しい、是迄の罪業消滅になりさうな善事に投ずる道を考究して見やう。なあ間、棄てたと諦、今日恁して悔悟をしてくれた、僕は死んだ弟が生返つも喜ぶぞ！

貫　荒尾君、貫一は孤兒だが、君の友誼が百人の親兄弟よりも嬉しい！

兩人手を取つて感慨。

折から、玉垣の蔭より蒲枝、髪を草束に結びて、白襟紋附、手に珠数と蝙蝠傘とを持ちながら出て來る。

蒲　間さん、其後は御不沙汰を。（おや、荒尾さんで居らつしやいましたか。（と二人に會釋する）

貫一は不快な顔。

荒　（迷惑さうに）又悪い所で逢うた。

蒲　まあ、御挨拶で御座いますね。お宅へ伺へば毎もお留守で、偶ま恁うして都合好く御目に懸れば其ですもの。

荒　所が、僕の方は一向都合好く無いじやからね。

貫　（見かねて）赤樫さん、何か御用ですか。

蒲　えゝ、今日は丁度亡くなりました赤樫の骨揚で御座いまして、歸に此邊を通りましたから。此頃中赤樫が危篤やら何やらで、つい御轉居の御見舞にも上りませんで御座いましたから、只今私お宅へ御寄り申したので御座いますよ。何ですか、向は大層御取込てすのね。

貫　其が何うです。

滿　其が何うでもありませんが、貴方は一層高尚な事業をお始め遊ばして。

貫　那は僕が始めたのでは無いのです。今度狹山商會と掲げてある通り、狹山と云ふ男が今度開いたので、僕は那の家の今では寄人も同樣だから、此間も御願して置いたが、何うか貴方も、餘り御入での無いやうに願ひたい。

滿　おや、分らないぢや御座いませんか、豫て御懇意で貴方をお訪ねするのに、狹山商會と何ういふ關係が御座いますの。

貫　貴方のやうな利口な方に、其がお分りない？

滿　分りません。

貫　ぢや露骨に言ひますが、狹山商會は御覽の通りの事業です。其に貴方のやうな御職業の方が、設ひ僕をお訪ねなさるにしても、餘り足茂く出入して下さると、商會の躰面にも信用にも關します。

滿　問さん、其は餘り現金な愛相盡しぢや御座いませんか。然う云ふ貴方も、つい昨日まで御同業で被居つた癖に。

昨日は昨日、今日は今日、問は生れ變つたのです。生れ變らぬ前のお付合は、生れ變らぬ前のお付合として、僕は一切過去に喪りたいのでの。

滿　（有繋に憤として）能く分りまして御座います。然うまで言はれて、私も人間です、二度と御目に懸りに出やうとは致しませんで

すから、御安心下さいまし。(と斷乎言に荒尾に向ひ)間さんには何されましても、荒尾さん、私……

貫　いや、荒尾君の債務の件なら、其はされて居ますから、直ぐ爰で處置しませう。

荒　あゝ間、其は可かん、僕の借財は、元々恩人の爲めに恁うなつた、清淨な性質のものじやから……

貫　(遮つて)だから、不淨の財を善事に活用するのだ。(と名刺を出し、鉛筆にて金高を記入し、滿枝に)さあ、是を御渡して置きます。貴方も今日は佛事の御歸で證書を御持であるまいから、此名刺を持つて、何時なりとも商會の方で受取つて下さい。

滿　いゝえ、私貴方から受取る理由は御座いません。

貫　貴方にも似合はない事を言ひますね、誰の手から返濟しやうと、債務者たる荒尾君の名義であつたら、故障は無い筈ぢやありませんか。

滿　枝澁々受取る。

貫　さあ、只今でも差支ありません、向で受取つてお歸り下さい。

滿　然う被仰らなくとも歸ります。(可悔げに身支度して)荒尾さん、慥に其では受取りまして御座いますから、貴方も御安心遊ばしし。

荒　はあ、長い事御世話を懸けました。

滿　枝、上手に歸り行く。

貫　(熟と見送りて)貴女。

滿　は、御用ですか。（と立留る）

貫　貴方にも最う是でお目には懸るまい　久しくお付合した間が餞と思つて聞いて下さい。ね、此の時ながら悔悟を爲ました、貴方も……いや、貴方ほどの　然ういふ事に一生を沒して了ふのは如何にも嘆はしい。赤樫さんも亡くなられた事だし、貴方も最う心眼を開いて、同じ其才を他の方面に働かせたら、恐く賢婦の譽もお取りなさるでせうに。

滿　どう致しまして！貴方の二の舞とやらぢや御座いませんが、思の慨はぬ復讎に、私是から一層世間の殿方を苦しめますで御座いませう。（と言捨てゝ入る）

貫一は情無げに、荒尾は淺しげに後を見送る。

荒　終に度すべからずじや。現代婦人の傾向を、恐く那が露骨に表現したものじやらう。いや、君に取んだ迷惑を懸けて了うた。

貫　君の心事から云つたら、無論潔く無からうが、那のくらゐの友誼は僕にも盡さしてくれ給へ。て、君も此際金錢上の累は悉皆僕に一任して、どうか身輕になつて、一番華々しく社會に打つて出てくれないかね。

荒　忝ない！今にして始めて君の一臂を假りるぞ。荒尾讓介未だ老いはせんじや、是からの活動を見てくれ。

貫　是非祈る！（と言つて立上り）最う向の支度も出來たらうから、君の前途を祝して久振に盃を擧げやう。

荒　僕の前途に君の前途、併せて狹山商會の前途もじや。（と立上

る）

貫　僕の前途は未だ祝して貰ふには早い　屋を出て、撫然として青葉の梢を見遣り）最う悲皆夏に、僕も青年の春を情無く過して了つたよ、あゝ、長い厭　死たのだ。

荒　青麥や涼しく醒す花の醉じや、お互に是から眞面目の生活に入るのじやないか。

所へ、狹山羽織袴にて、例の玉垣の陰より急しげに出て來る。

狹　問さん、客も追々集りましたし、明も最う點きますから、どうかお席に直つて戴きたう御座いますが。

貫　宜しい、直ぐ着席しませう。時に狹山君、這方は僕の親友で、荒尾君と云つて、君の兄さんの遊佐君なども豫て懇意で。（荒尾に）

荒尾君、遊佐君の弟の狹山元輔君です。

荒　はあ、君が狹山君で。今度は至極結搆な事を計畫されて、間にも今言うて居るのじやが、どうか立派に成功を祈りますじや。

狹　難有う御座います、皆最う間さんの御蔭で御座いまして。では、兄も最う參ります筈ですから、貴方も御迷惑で御座いませんなら、どうか心祝ですから、御一處に席へお直り下さる譯には參りませんか、ねえ間さん、如何なものでせう。

貫　僕も然う思つて、今一處に行かうと爲し居る所です。

荒　お愛でたいのぢやから、僕も遠慮せんのじや、是非席末を汚さうと思ひましてな。

狹　是非どうぞ。

其所へ、同じく玉垣の陰より狭山の妻静、圓髷に紋附、急足に出來る。

静　（貫一に）旦那様、只今あの……（と言半して、荒尾の姿に心着き口籠る）

貫　お静さんか、何だね、甚く慌てゝ。

静　はい、少しあの……（と荒尾に氣を置く）

狭　何だいお静、何か急な事でも出來たのか。（と心許無げに聞く）

静　え、あの、旦那様の所へ……。

貫　僕の所へ。あゝお静さん、這方は（と荒尾を）僕の親友で、少しも管はんのだから。

静　然やうて御座いますか。（と始めて安堵して、荒尾に會釈し、さて貫一に）只今女の方がお俥で被入いまして、是非貴方にお目に懸りたいと言つてお待で御座いますが。

貫　私に？（眉を顰めて）あの赤樫と云ふのぢやないかね。

静　いえ、那の方とは違ひます。お名前を伺ひましたけれど、仰らないで、唯貴方にお目に懸りたいと仰るのですが、どうも御様子が變なので御座います。

貫　變なとは？

静　何ですか、此の暖いのにコートなど召して、仰る事も妙ですし、お顔色なぞ御病氣のやうにもお見受けしますが……。

荒　間、宮さんぢやないか。

貫　然うかも知れん。左に右く家は取込んで居るから、爰へ連れて

來て貰ひませう。

靜　お連れ申しますか、は。（と靜は行く）

荒　宮さんじやぞ、豫て病氣じやと聞いて居つたから。

貫　どうも然うらしい。

間も無く、靜に手を引かれて宮出て來る。髪亂れ、色蒼白め、目色怪しく、絶えず有らぬ方を見廻して、惘然佇みたるまゝ、人々の姿も目に入らぬものゝやう、吾妻コートの下に白の着物仄見ゆ。

貫一も荒尾も、其の變れる姿を驚き見成りて、暫く言葉も無し。

荒　（先づ近寄りて）宮さん。

宮　……

荒　宮さん、何う爲ました？貴方は病氣のやうじやね。

宮　……

荒　僕荒尾ですぞ、忘れましたか。

貫　（も傍に寄りて）宮、何う爲た。これ、宮。

宮　……

荒　宮さん、間が分りませんか。

宮　……

靜は貫一の其れと知りて、狹山に呼さながら、差合む涙を拭ひつゝ打嘱る。

荒　何にも通ぜんやうじや。可哀さうに、到頭發狂して了うたと見

ゆる。(と目を瞬き)何時か上野で圖らず逢うた時に、何うしたら罪を容るさるゝか、悔へてくれいと僕に泣いて縋つたのじや、けれど、僕も有繋に死ねとは言得んじやつた、強つて聞くから、覺悟一つじやと言うて別れたが、宮さんには其れが解けんのぢやつたらう。じやが宮さん、貴方は解かんでも、自然に解いたのじや、間には私から取成して上げますぞ。吁、貴方は死んだも同然、生きたる死骸じや。

荒尾　荒尾も貫一も涙を呑む。

秋　(目を拭うて)間さん、此のお方の事は豫々貴方のお話にも聞いて居ましたが、偖うお成りなさるまで御悔悟なすつたのかと思へば、如何にもお氣の毒で、お可哀さうて、始めてお目に懸つた私まで泣きました。貴方も最う容してお上げなすつたら……。

御　(涙を拂つて)容して、而してお手元へ引取つてお上げ申したら、自然氣も落着き遊ばすでせうから、ねえ貴方。私共夫婦が御恩返しに、設ひ二人の命を縮めましても、必ず最う一度元の御正氣にお成り遊ばすやう御介抱も致します。狹山や私の一心でも、屹度それはお直し申さずに措きませんで御座います。

貫一は宮の傍に立竦みたるまゝ、面を垂れて言葉無し。

荒　いや、能く言うてやつてくれました。(と二人に言つて)間、僕からも宮さんに代つて詫びる、容るさるゝものなら容して上げてくれ。最う死んだものじや、生きたる死骸じや、死者に罪は無い。(更に二人に)さあ、傍に居ては間も迷惑じやらう、席へ案内して

貫ひませうじや。

三人は心利かして去る。

後に貫一、悚へし涙留度も無く、身を顫はして泣く。

貫　宮さん、容した！（と宮の手を握り緊む）

宮靜かに其手を拂うて、目は餘所に注ぐ。

貫　あゝ矢張分らんのか、情無い！

所へ、宮の母隆、同じく玉垣の蔭より轉ぶやうに駈け來る。

隆　おゝ、爰に居たかえ、甚麽にまあ心配した事か。貫一さんお前さんにも面目無い！

貫　姨さんですか！（とばかり、感無量）

隆　貫一さん！

貫　姨さん！宮さんは可哀さうな事になりましたなあ！

隆　察して下さい！（と泣く）

貫　（暫くして）何時から這麽になつたのです。

隆　最う大分前からで。お前さんの所へは絶さず手紙を出して居たさうだから、是の胸の中はお前さんも知つて居ておくれだらう、其が元で悒々病ひ出して、到頭思迫めた擧句が、氣まで那麽になつて了つたのぢやありませんか。富山でも持餘して、最う二月ばかり前から、離緣同樣に家へ還つて居るのですが、極もう靜かで騷ぎは爲ないけれど、始終口癖のやうに、貫一さんの所へ謝りに行くのだ、容して貰へなかつたら、今度は死んで謝るのだ、然うしたら貫一さんも少しは可哀さうだと思つておくれだらうと、其

ばかり言續けて、ねお、那を見てやつておくんなさい、那通り白無垢を着て居るが、那はお前さんの所で死ぬ時の用意だと言つて居るんですよ。それでもね、別に飛出す樣子も無いから、氣狂の事だと思つて爲るまゝに爲せて置くと、今日白を着たまゝ偶いと居なくなつたものだから、私も喫驚して、是は的りお前さんの所だと思つて追駈けて來たのですが……貫一さん、私も此通り手を突いて賴みます。那麽にまでなつてお前さんを思迫めて居る那の心を、お前さんも何うぞ、不……不憫と思つて……一言容したと言つて聞かしてやつておくんなさい。

貫　姨さん、僕は最う悉皆悔悟を爲て、怨なぞ少しも殘しちや居ません。容したです、曩から容して居るのですが……然し、其……

隆　……其が宮さんには分らんので……。

隆　分らないとは、まあ情無いぢやないか、那ほど不斷言續けて居ながら……（宮を引寄せ）宮さん、お前貫一さんは最う容してくれださうだよ、分らないかね。

宮　宮引寄せられたるまゝ、熟と母の顏を眺むる。

宮　（突然躰を揉んで）阿母さん、熱い！

隆　阿母さんが分るかえ。

貫　一も固唾を呑んで其顏を見詰むる。

宮　熱いわ。

隆　熱い筈さ。此の蒸すのにコートなぞ着て居るんだもの。那樣着物を着て居て、爰ぢや脫がれませんよ、少し辛抱お爲。

宮　阿母さん、熱いのよ！（と紐の結んだまゝ、コートを脱がうとする）

隆　爲やうが無いねえ。（と言ひつゝ紐を解いてやる）

宮　宮コートを脱ぐ、雪のやうなる白無垢、白の圓帶。

（自分の姿を見て）あゝ、然う、私貫一さんの所へ謝りに行く意て支度したのだわ。阿母さん、一處に行つて下さい。

隆　宮さん、貫一さんは爰にお居てだよ、分らないかね。

貫　（宮の手を取つて）宮さん、僕は貫一だよ。ね、能く顏を御覽、宮手を取られしまゝ、貫一の顏を空とり見詰むる。

宮　おゝ、貫一さん！（と縋り付く）

貫　分つたかね。

宮　貫一さん、容して……容して下さい！（と膝に泣伏す）

貫　（啞と兩手を肩に懸けて）容すとも、宮さん、お前の躰は貫一が一生介抱してやるよ。

隆は見る目も得堪へず、背を向けて面を掩ふ。

此時、正面の球燈に潑と火點りて、樂隊の吹奏緩く起る、多勢拍子の音。同時に、發揚の目を輝して其方を見遣りし宮は、旋て奏音の絶々になると共に、再び欝悒の色に沈み行く。

隆　（樂歌むのを待つて、面を揚ぐ）お宅では、今日はまあお賑かですね。

貫　宮さん、二人は寂しいね……。

更に樂隊の吹奏起る。

（雜）

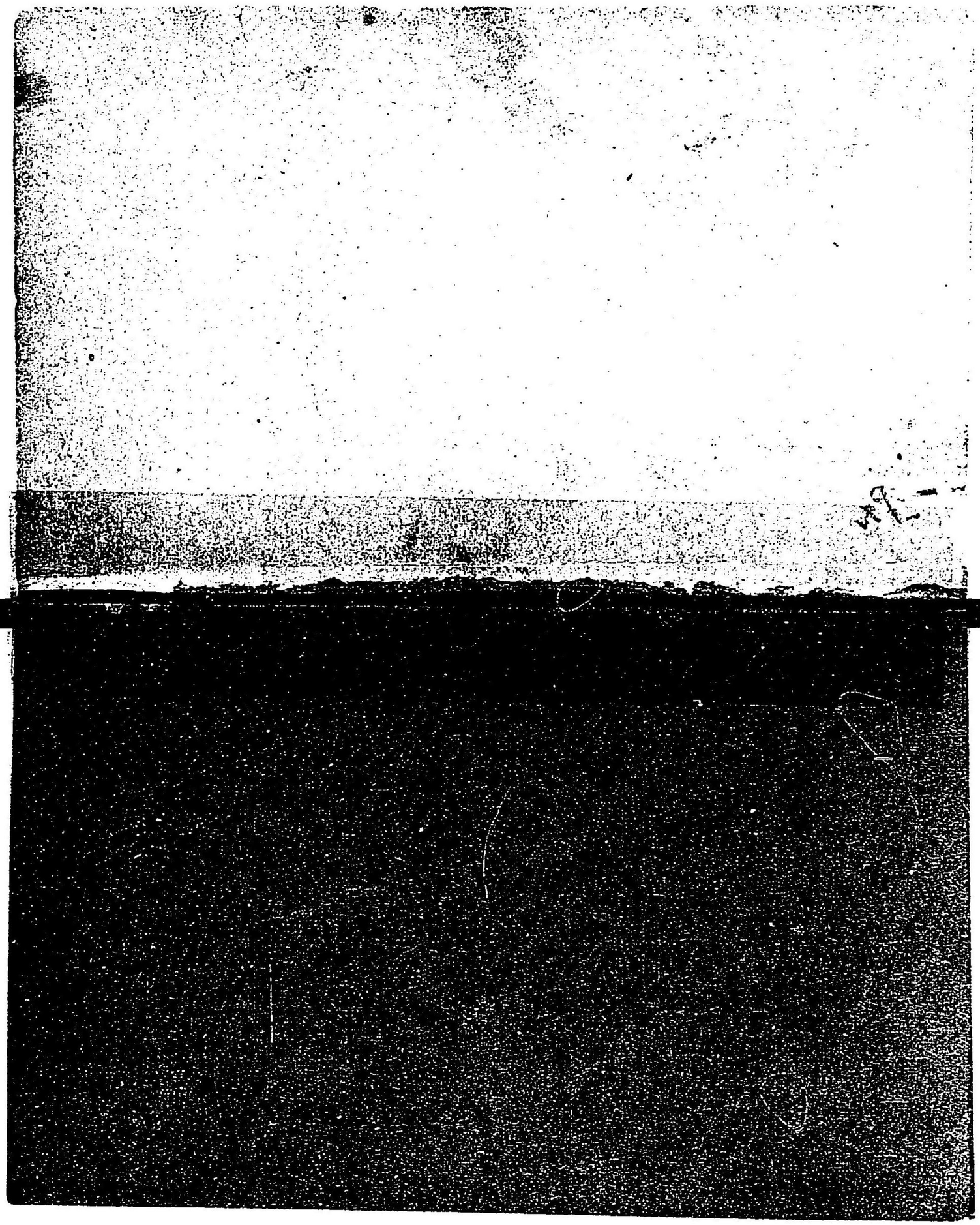
閩本佳句校文 終

明治三十八年六月六日印刷
同　三十八年六月九日發行

（實價金三十錢）

著作者　小栗磯夫
發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田むゑ
印刷者　東京市麻布區西町廿六七番地　佐久間衡治
發行所　東京市日本橋區通四丁目角　春陽堂
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

十千萬堂藏版



94
377

94
377
Ⓜ

088858-000-8

94-377

金色夜叉

尾崎　紅葉／原著

M38
DBK-0041